

Newsletter

June 2019

<http://www.aack.info>

目次

「サル学」から「ウマ学」へ：

今西錦司と梅棹忠夫のパイオニアワークを逆にたどる

松沢哲郎1

追悼 原剛さん（2019年1月2日逝去）

ハラさんへ

斎藤清明8

ありがとう、原君

土生昶毅9

原君との自然観察会

本郷一雄9

原剛くんへの手紙（2016年8月、夏の思い出）

前田栄三10

原君が逝ってしまった

渡辺良男12

第44回雲南懇話会（2018年4月21日開催）

講演概要

山岸久雄、前田栄三13

会員動向16

編集後記16

「サル学」から「ウマ学」へ： 今西錦司と梅棹忠夫のパイオニアワークを逆にたどる

松沢哲郎

幸島のサル：日本の霊長類学の誕生

AACKの第4代会長をつとめた今西錦司さん（1902-1992）は、日本の近代登山の先駆者のおひとりだ。『山岳省察』（1940）がまず先に世に出て、本業の生物学の『生物の世界』（1941）を著した。その今西さんは、日本の霊長類学の創始者といって良いだろう。1948年12月3日に、宮崎県の幸島に野生のサルを見に行った。その日をもって、学問の誕生とみなしている（文献1、2）。当時まだ学部生だった川村俊蔵さん（のちに京大霊長類研究所教授）と伊谷純一郎さん（のちに京大理学研究科教授）の2人を伴った（以下では敬称を略する）。

当初の調査目的はサルではなかった。都井岬のウマの研究である。（サルとかウマとかカタカナで動物種を表記するのが生物学の慣習なのでご寛恕いただきたい）。伊谷が1985年におこなった日本霊長類学会の発足大会での講演記録によれば（文献3）、「馬の調査の4日ばかりを割いて、御崎の北約12kmの幸島を訪れまし

た。（中略）それは12月3日のことでしたが、白い野菊が一面に咲いていたのを思い出します」とある（図1）。

都井岬には、御崎馬と呼ばれる日本の在来馬がいる。ウマを追う中でサルを見るうちに、人間の社会の進化を探るならばウマではなくてサ



図1 幸島の初期の調査。今西が中央で、向かって左が川村俊蔵、右が伊谷純一郎、後方が徳田喜三郎（提供：伊谷純一郎アーカイヴス）

ルの研究をしよう、ということになって初めての幸島行きが実現した。したがって12月3日の調査行が、日本で最初に計画された野生ニホンザルの調査である。

幸島のサルはすでに戦前に冠地藤市（1871-1960）ら地元の有志の働きかけで1934年に国の天然記念物になっていた。つまり今西らは幸島にサルがいること自体は知っていたのだ。ただしこの初調査のときには実際にサルを見ることはできなかった。終戦直後に進駐軍の将校がサルを手に入れようとして、島に渡った兵隊が追い回したのでサルは人を恐れていたという。

都井岬に戻った彼らは岬で幾度かサルの群れにまた出会っている。今西グループのサル調査は幸島に重点が置かれていたが、それが全国に展開した。たとえば伊谷は、1952年の6月までは幸島で調査し、7月には屋久島の最初の調査を伊谷と川村でおこなった。1952年8月11日に伊谷と徳田がついに幸島のサルの餌づけに成功した。日本初の餌付けの成功である。伊谷はさらに単独で10月には下北、八甲田、十和田、三面、小国とニホンザル分布の北限域になる東北地方の調査をおこない、11月に幸島に戻って年を越した。

翌年の1953年の夏に、幸島でサルのイモ洗いが最初に観察された（図2）。これが「サル学」の興隆のきっかけとなった。最初の発見者は冠地藤一の娘で地元の研究協力者の三戸サツエである。1956年には財団法人日本モンキーセンター（JMC）が設立され、それを足掛かりにして1967年には京都大学霊長類研究所が創立された。翌1968年に研究所の附属施設として



図2 幸島のサル（撮影：松沢哲郎）

幸島野外観察施設が発足している。

2008年に霊長類研究所を母体にして野生動物研究センター（略称WRC）が京大に誕生したとき、幸島観測所としてWRCに移管された。天然記念物の島がもつ、サルだけではない魅力を引き出すためだ。技術職員（鈴木崇文）1名だけの小さな観測所だが、1948年から数えると72年目になる野生ニホンザル研究が継続している。9世代にわたるサルの国の歴史が今も記録されている。

都井岬のウマ：御崎馬の調査

今西らはウマの調査をしていてサルに出会った。その野生ウマの調査の開始は、すこしさかのぼって1948年4月18日である。1936年発行の文献（佐々木良、「野生状態に保存せられた御崎馬」、日本の自然と生物、123—136ページ）を今西が論文で参照しているので、御崎馬の調査それ自体は今西らが最初というわけではない。都井岬に野生のウマがいると知っていて調査に出かけた。

野外調査の結果は、今西の単著として3つの論文にまとまっている（文献4、5、6）。その調査期間は、①1948年4月18日から28日までの11日間（川村同行）、②1948年11月22日から12月11日までの20日間（伊谷と川村の同行）、③1949年8月17日から30日までの14日間（論文には同行者の記載なし）、の3つの時期に分かれる合計45日間だ。したがって第2回目の「馬の調査の4日ばかりを割いて・・・」伊谷の回想どおり幸島にサルの調査に行ったことがわかる。

都井岬の御崎牧はおおよそ500haあり、その中に小松ヶ丘（今西の記載ではコマツガ辻、標高約280m）と扇山（今西の記載ではイワグラ、標高296.3m）という、草に覆われた2つの山がある。御崎馬は半野生の在来馬だ。地元の高鍋藩の方針で都井岬に放たれてから約400年間、ウマたちは自由に動き回って暮らしている。4月から5月にかけて子どもを産む。今西らは、その春を見て、冬を見て、その次の年の夏を見た。4-9月は草地で生活して草をはむ。10-3月は山林に引きこもって林内の草木を食べる。御崎馬は「自然の中に生きる日本特有の動物」という特徴からウマとしては唯一国の天然記念物に指定されている。1953年のことで今西らの



図3 幸島の山頂三角点の標高117mにて（撮影：鈴木崇文）

調査の後ということになる。

今西の残した3つの論文を読んでみると、合計で約70頭を見た。ただしおとな雄は3頭だけだ。毎年秋にウマ追いがあって雄の若駒をまびいていた。今西はウマの社会を見つけようとしているのだが、当時はまだ明瞭には理解できていなかったことがわかる。冬の調査ではかれが想像していたのと違って「単独生活者が多い」「全体の約3分の1が単独だ」という記述からそう読み取れる。

一見して単独とみえるほど都井岬では個体間距離が大きい、じつはウマは基本的には「ワン・マイル・ユニット」を構成していることがその後の研究からわかっている。「ハーレム」とも呼ばれるこの集団は、種雄1頭を中心に複数の雌とその子どもたちなどからなる集団だ。「ハーレム」という呼び名はジェンダー論や人類学的には穏当ではないが、生物学の用語としてはほぼ定着している。ただし厳密には雄1頭だけとは限らない。

2019年2月末に学部生3名（南俊行、横坂楓、板原彰宏）とともに久しぶりに幸島と都井岬を訪れた（図3）。サルのみぎ洗いを見たあと、都井岬にまわった。今なら自動車でもわずか20分程度だ。御崎馬は116頭（雄52頭、雌64頭）だった（2019年2月23日現在）。4つの地域に分かれていて、小松ヶ丘には8群のハーレムと単独1頭の合計48頭がいる（図4）。扇山には6群のハーレムと単独7頭の合計49頭、扇山の隣接地に1群のハーレムと2群の雌雄ペアと1群のバチェラー群（雄だけからなる集団）の合計11頭、扇山の別の隣接地に1群のハー

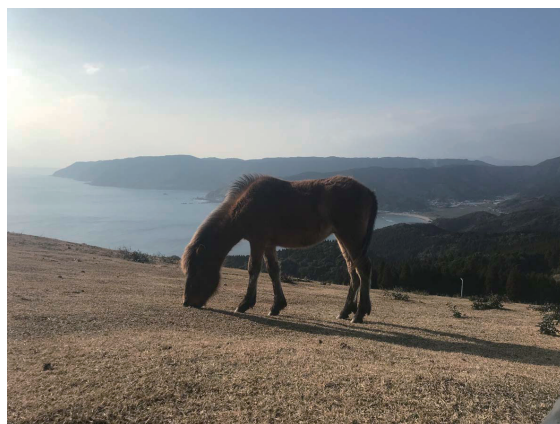


図4 都井岬のウマ（撮影：松沢哲郎）

レムと1群の母子ペアの合計8頭である（都井岬ビジターセンター記録から引用）。

今西らの都井岬のウマの野外研究は、中断されたままで実を結ばなかった。しかし「サル学」という新たな学問を生み出すきっかけの役割を果たしたといえるだろう。じつはもうひとつの重要な発展として、都井岬のウマと幸島のサルの調査が引き金となって、サルを含めた屋久島全体の初調査が1949年に展開した。

今西から梅棹への書簡の発見：モンゴルから屋久島へ

ウマ・サル・屋久島の3つのプロジェクトを同時に差配する。そうしたプロデューサーとしての今西の活躍ぶりを示す新たな資料がでてきた。国立民族学博物館の小長谷有紀教授が中心になって、梅棹忠夫（1920-2010）の回顧展をした（文献7）。そのときに梅棹が保管していた今西関連の未整理の資料があり、まだアーカイブとして公開されていない。小長谷が『ヒマラヤ学誌』20号に、「日本霊長類学の黎明期に関する資料：国立民族学博物館の民族学研究アーカイブズから」と題した論文で、その一部をこのたび公表した（文献8）。

この小長谷論文で、1944—45年の西北研究所を起点にした内モンゴル調査の写真が12葉、1949年の屋久島調査にかかわるハガキ4通と電報1通が掲載されている。

内モンゴルの写真には、調査隊の一行の中央に今西が座り、梅棹が馬上で日の丸を掲げた姿がある（図5）。今西・梅棹らは1944年9月6日に西北研究所のある張家口を出発し、外モン



図5 内モンゴル1944年の今西と梅棹（提供：国立民族学博物館）

ゴルとの国境まで行って翌1945年2月26日に帰着した。およそ1500kmを160日間で移動した。冬のモンゴルを見た最初の日本人である。モンゴル調査資料の中心をなすフィールドノートが国立民族学博物館で公開されている。また今西の足跡を丹念に追った斎藤清明の報告から旅の概要がわかる（文献9）。

秋から冬にかけてのモンゴルの草原旅行。荷物は牛車で運び、今西・梅棹らは乗馬で進んだ。モンゴル人はいっさい耕作をしない。かれらの財産はすべて家畜である。ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギの5種類である。モンゴル語でゲルと呼ばれるフェルト製の円形の住居に立ち寄っては、その家の牧業の状況を聞き取りした。冬がきてときには気温が零下35度まで下がる。ウマをラクダに乗り換えての旅だった。

終戦を迎え、日本に帰還し、モンゴルという国外のフィールドを失った今西・梅棹が着目したのは屋久島だった。今西が梅棹に宛てた屋久島の手紙の1通目は昭和24（1949）年8月14日に門司から。2通目は翌日の8月15日、3通目は8月16日、4通目は8月25日の消印で、いずれも都井村からで、屋久島調査に関する段取りを梅棹に指示する内容である（図6）。前述した都井岬のウマの第3回目の調査のときに発したハガキだ。今西はウマを見ながら屋久島の調査を考えていた。

屋久島は、周囲約130km、面積505平方km。九州最高峰の宮之浦岳（標高1935m）を擁し洋上アルプスと呼ばれる。年間降水量は平地で4,000mm、山岳部では10,000mmに達し、山頂部では冬季に積雪がある。海岸部には世界でも最大規模の照葉樹林が広がっており、標高800mを超えるとスギなどの針葉樹の巨木が

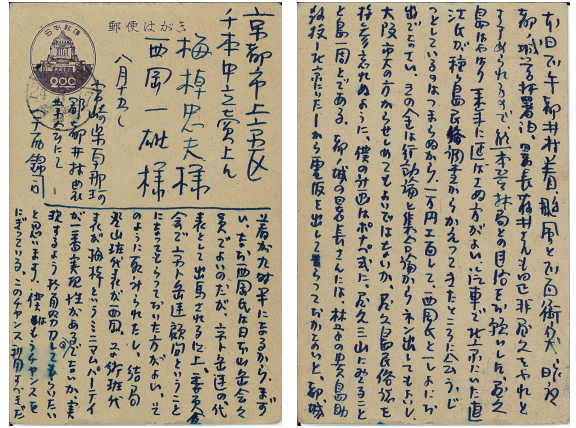


図6 今西から梅棹らに宛てた都井村から1949年8月15日消印のハガキ（提供：国立民族学博物館）

多いヤクスギ林へと変わっていく。さらに標高1700m以上ではヤクシマダケの草原へと変わる。海岸から山頂まで、標高に沿って大きく植生が変化することが特徴だ。「屋久島スギ原始林」は1924年に天然記念物に指定され、1954年に特別天然記念物になり、1993年に世界自然遺産に登録された。

今西・梅棹によるこの屋久島の最初の調査が1949年におこなわれ、登山と学術の組み合わせだったことが新資料からわかった。上述の今西からの手紙の中身を拾い読みすると、「本日正午都井村着、(中略)昨夜都ノ城営林署泊、署長藤井さんも是非屋久をやれとすすめられる」「屋久島はやはり来年（注、1950年）に延ばさぬ方がよい」「屋久島民俗誌を持参忘れよう」「僕の計画はポナペ式に、屋久三山に登ることと島一周である」「登山班代表が西岡（注、西岡一雄）、学術班代表が梅棹というミニマムパーティが、一番実現性があるのでないか」「僕はもうチャンスにぎっている。このチャンスを利用すべきだ」「fieldworkハドウシテモアル程度デ継続シテオイタ方ガヨイ。ウマハ来年（注、1950年）4月ニモウ1度ヤルツモリダ。宮崎ヘユクノハサル島ノサルヲヤルタメニ縣ヲ動カソウトイウ考エデアル」と読める。今西さん、ほんとうはただ屋久島の山頂に登って島を一周したかったのだ、とも読める内容だった（笑）。なお西岡一雄（1886—1964）は三高出身(中退)で今西の16歳年長の登山家である。ロック・クライミング・クラブRCCの創設者の1人で、登山用具店「好日山荘」を創業した。



図7 屋久島の調査基地「PWSハウス屋久島」(提供：京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)

1949年当時、西岡が63歳、今西が47歳、梅棹が29歳である。

のちに出版された梅棹の自伝によると(文献10)「1949年には屋久島の調査をおこなった。京都府山岳連盟からの派遣というかたちで、今西さんと好日山荘の西岡一雄老人とわたしの3人でいった。屋久島は当時日本政府の行政権がおよぶ最南端の島であった。鹿児島から船で種子島をへて、屋久島の安房に上陸した。最高峰の宮之浦岳(1935m)にのぼり、そのあと島を一周した」ということで、つじつまがあっている。

今西らの屋久島の最初の調査は1949年9月におこなわれた。京都府山岳連盟屋久島踏査隊である。伊谷のいう伊谷・川村の屋久島のサル調査は、そうした今西・梅棹の最初の努力を礎にして1952年7月におこなわれたものだとわかる。屋久島には、現在、京都大学野生動物研究センター所属の屋久島観測所があり、今も多くの若者を惹きつけている(図7、文献11, 12)。サルだけではなく、シカもいて、ウミガメも来て、ガジュマルやアコウの木があって、豪壮な滝と沢があり、何よりも人々の暮らしがそこにある。霊長類研究所長の湯本貴和らによって「屋久島学(Yakushimaology)」が標榜され、「屋久島学ソサエティ」という学会組織ができている(<http://yakushimaology.org/>)。その源流を1949年の今西・梅棹の探検に見出すことができるのではないだろうか。

「屋久島民俗誌を持参忘れぬように」という今西のハガキの表現がまるで警句のように響く。民俗学者の宮本常一(1907-1981)が、

1940年1-2月に屋久島の調査をして、1943年に刊行した著作である。今西は、それを参照しつつ、島の自然と文化の全体を見ようとしていたのだ。梅棹は、翌1950年には熊本阿蘇地方、1951年には今西らとともに高野山の奥の野迫川村の調査をしている。屋久島の調査結果は、『思想』(岩波書店)の1951年9月号に「ヤク島の生態」と題して公表されている。それを読んだ柳田國男(1875-1962)から突然の手紙が来て、梅棹は上京して柳田と初めて親しく話をした(前掲の文献10)。柳田76歳、梅棹31歳である。

「サル学」から「ウマ学」を創る

筆者はチンパンジーの研究をしてきた。アイプロジェクトと呼ばれるチンパンジーの認知研究が1977年11月10日に始まって42年目になった。チンパンジーには人間にはない瞬間記憶があることを見つけた。石器を使うボソウの野生チンパンジーの研究も33年目になった。親から子へと世代を超えて伝える文化的伝統がある。

そうした研究を基軸に、チンパンジーの同属別種のボノボ、そしてゴリラやオランウータン、さらにはキンシコウやニホンザルの野外調査へと手を広げて、この5年間はウマの研究にも意を注いでいる。人間の進化を知るためには、霊長類だけではなく、霊長類の進化の背景にある哺乳類そのものに着目して、その共通祖先から理解する必要があると思ったからだ。

2008年に霊長類研究所を母体にして野生動物研究センターWRCが創立された。それを祝して河合雅雄が述べているが、WRC設立には2つの意義がある。まず「わが国の霊長類学はフィールド研究を中心に発展してきたが、近年やや停滞気味である。フィールド研究の強化拡大に新しい風を吹き込むだろう。もう一つは哺乳類学を基盤にした霊長類学の構築に、強力な拠点を得た」(文献13)。

人間の進化を霊長類のなかで考えるのではなく、比較の枠を広げて哺乳類のなかで考えたい。そうした流れのなかで着目したのがウマだ。あまり一般に意識されないがウマ科はウマ属だけ、1科1属である。その存在は際立っているが、乗馬や競馬や荷役や牧畜の対象でしかなくて、ウマという生き物の全体を捉えるような科



図8 ウマの写真を選んで鼻づらで触る課題（提供：友永雅己）

学的研究がこれまでほぼ無かった。①先行研究が少ない、②野生のくらしがある。③多くの人が興味をもってくれる生き物だ。

そこで2014年1月に2頭のウマを買って研究を始めた。霊長類研究所の友永雅己教授らとの研究である。チンパンジーと同じように、ウマもコンピューターのタッチパネルを使えることを示した（文献14）。ウマが鼻づらで触るタッチパネル課題という新たな研究手法の開発である。ウマも数の大小がわかり、図形の形や大きさを区別し、さらにはウマという概念をもっていることが写真の識別実験からわかった（図8）。

チンパンジーと同じように野生のくらしも追おうと考えた。認知実験もするし野外観察もするという比較認知科学の手法である。そこで、ウマに詳しいソルボンヌ大学のカルロス・ペレイラ博士の協力を得て、彼の出身地であるポルトガル北部の予備調査をし、アルガ山の野生ウマにねらいを定めた（図9）。野生動物研究センターの平田聡教授ら若い同僚たちと野外調査を2015年10月から始めている。ここのウマたちはオオカミに捕食されている。そうした生態系の中で暮らす野生本来の姿を知りたかった。森に暮らす霊長類と違って、山頂部に広がる草原に暮らすウマなので、ドローンで空から空間配置を正確に把握できるのが利点だ（図10）。地上からの観察で約200個体を識別して照合すると、ハーレム群が複数あって、パッチェラー群がいて、全体として地域共同体を作っていることがわかった（図11、文献15）。人間と同じ「共同体と家族」に相当する重層社会が



図9 アルガ山の野生ウマを観察する平田聡（撮影：松沢哲郎）



図10 ドローンを使って空から観察する井上漱太（撮影：松沢哲郎）



図11 アルガ山の野生のウマ200頭を個体識別した（提供：リングフォーファー萌奈美）

ウマで見つかった。

「サル学」で培ってきた個体識別や比較認知科学の手法を応用し、さらにはドローンや暗視カメラのような最新の機器を持ち込んで、「ウマの世界」の研究を始めた。霊長類学



図 12 『生物の科学 遺伝』2019年5月号特集「ウマの世界」(提供:エヌ・ティー・エス発行『生物の科学 遺伝』2019)

(Primateology) に対して馬類学 (Equinology)、サル学に対してウマ学と呼べる新しい学問の創出である (図 12、文献 16)。

こうして自分では新しいと思って始めたウマの研究なのだが、今西から梅棹に宛てた手紙の発見を契機に自筆のフィールドノートに遡ってその足跡をたどってみると、じつはかれらも同じようなことをすでに構想していたことがわかる。今西・梅棹の遊牧論である。森林にすむ狩猟民たちが草原に進出して、そもそも草原に群れで生活していた有蹄類の動物の群れに接近して、そのまま動物と人間の共同体が成立したと考えた。

遊牧の起源に迫るためには、野生の暮らしや草原のなりたちを知り、コミュニケーションや認知機能や人との関係も研究しないといけない。「ウマの世界」のまるごと全体を知るという「ウマ学」の構想は、人とウマとの関係に着目していえば遊牧の起源を問う作業だといえる。巨人の肩の上に乗ってわたしは遠くを見ていたのだ、と思った。梅棹はその自伝を『行為と妄想』と名付けている (前掲の文献 10)。いわく「妄想が先行していたからこそ、行為が成立する。すべての探検と学究の糸口は妄想からはじまるのである」。わたしもまたそうした妄想に生きている一人なのだ、と改めて自覚した。

梅棹のアーカイブスは、国立民族学博物館梅棹資料室に整備されている。この機会に、以下の手順でぜひ参照されたい。<みんなく HP の「共同利用」のメニューから「データペー

ス」を選択すると、「民族学研究アーカイブズ」のメニューが並んでおり、その中から「梅棹忠夫」をクリックすると、概要紹介画面に到るので、その左上にある「全リストへ」をクリックする。資料番号 11 のフィールドノートを選ぶ。その中の資料番号 19 以降が梅棹の内モンゴル調査である。今西のフィールドノートはその下の資料番号 57 以降の 11 冊だ。

ぜひ梅棹の資料番号 19 をみていただきたい。これは 1944 年 2-3 月の内モンゴルの草原で彼がたづつたフィールドノートだ。梅棹忠夫 23 歳、その妄想とも呼べる思索の軌跡を生々しく追うことができる。来年 2020 年は梅棹忠夫の生誕百年にあたる。

ニューズレターという媒体の性格上、長々とした謝辞は割愛するが、今西と梅棹のフィールドノートやハガキや写真といった原資料を示してくださった小長谷有紀さん、そしてウマ学の実際の推進者である友永雅己、平田聡、山本真也、リングフォーファー萌奈美、リナータ・メンドンサさんらの同僚諸氏、そして本稿に貴重なコメントをお寄せいただいた湯本貴和さんに感謝したい。

なお、今西錦司のハガキの公開については令孫にあたる今西拓人氏の許諾を得ました。記して感謝します。

参考文献

- 1) Matsuzawa T & McGrew W (2008) Kinji Imanishi and 60 years of Japanese Primatology, *Current Biology*, 18(14): 587-591
- 2) Matsuzawa T & Yamagiwa J (2018) Primatology: the beginning, *PRIMATES*, 59:313-326
- 3) 伊谷純一郎 (1985) サル学事始めの頃と今日の課題、*霊長類研究*, 1:5-14
- 4) 今西錦司 (1949) 御崎馬の社会調査: プレリミナリー・サーベイの覚え書きと問題の提出。生理生態, 3: 1-12
- 5) 今西錦司 (1950) 御崎馬の社会調査: 報告第 3 いままでに試みた調査の要約。生理生態, 4: 28-41
- 6) 今西錦司 (1953) 冬営地における御崎馬: 御崎馬の社会調査・報告第 2、動物心理学年報, 3:11-31
- 7) 小長谷有紀 (2017) 『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫—アーカイブズの山を登る』、ミネルヴァ書房

- 8) 小長谷有紀 (2019) 日本霊長類学の黎明期に関する資料—国立民族学博物館の民族学研究アーカイブズから—、ヒマラヤ学誌、20:119—128
- 9) 斎藤清明 (2013) フィールド科学をかんがえる—西北研究所を原点にして—、ヒマラヤ学誌、14:130-139
- 10) 梅棹忠夫 (2002) 『行為と妄想—わたしの履歴書—』、中央公論新社
- 11) 山極壽一 (2006) 『サルと歩いた屋久島』、山と溪谷社
- 12) 半谷吾郎、松原始 (2018) 「サルと屋久島：ヤクザル調査隊とフィールドワーク」、旅するミシン店
- 13) 河合雅雄 (2009) 哺乳類学と霊長類学、霊長類研究、24:181—182
- 14) Tomonaga M., et al (2015) A horse's eye view: size and shape discrimination compared with other mammals. *Biology Letters*, 11:20150701
- 15) Ringhofer M. et al (2017) Comparison of the social systems of primates and feral horses: data from a newly established horse research site on Serra D'Arga, northern Portugal. *PRIMATES*, 58:479-484
- 16) 松沢哲郎 (2019) 「ウマ学」への展望、生物の科学 遺伝、73:222-229

追悼 原剛さん (2019年1月2日逝去)

ハラさんへ

斎藤清明

大峯奥駆に入って四日目のこと、持経宿を出て、平治宿で休み、西行歌碑や今西錦司先生植樹のヤマザクラを撮影しようとスマホを手に取った。ついでにGメールを見ると、追悼文の依頼が届いていた。今西サクラはちょうど満開。その葉裏に、姿が浮かんでくるようなおもいがした。転法輪岳へゆっくり登りつつ、彼を偲んだ。

初めて会ったのは1964年3月、合格発表の日だったはず。私はうれしくて、西部構内にルームを見つけてたずねた。そのとき、たしか、彼も来ていた（ような気がするのだ）。入部し、あだ名がつけられた。私は上級生にひっかけられてついたが、彼はうまく避けた。スマートだとおもった。

一回生の夏山で一緒に南アの聖岳から赤石岳へ縦走し、荒川小屋で三日間沈して下山した。そのときすれ違った東京の私学パーティーの上級生が軽装なのを指さして彼は言った「下級生に重荷を背負わせるのが当たり前みたいだが、我々はいいなあ」。また、下山して便乗させてもらったトラックの運転手にタバコ銭を渡そうと、社会人なら当たり前のことを言ったのも、彼と浜本オジンだけだった。

春山は東北朝日へ、リーダー神山エスキーのもと、一回生は井上ジローと彼と私の三人。豪雪と悪天ではかどらず、祝瓶山から大朝日までがやっとのことだった。私のラッセルの後でも大きな彼はよく潜ったので、「もっとしっかりラッセルしてくれ」とボヤかれた。下山後、東京まで一緒に戻って、自宅に寄らないかと言ってくれたが、私は友人と会うので、ジローだけ付いていった。あとでジローから歓待されたと聞いた。

笹ヶ峰ヒュッテでは度々一緒になったが、ランプのホヤ磨きしながら「電気を引けばいいのに」と言っていた。じつに合理的なのだが、当時の私には、革命的にさえ思えたものだ。そんな彼の気持ちが、やがて自分の山小屋を近くに持ったり、最後には笹ヶ峰音楽祭を催すことにつながっていったのではないだろうか。

社会人になって、ネパールでのホテル建設の苦労や、作家のC. W. ニコルさんとのことなど、いろいろ思い出すが、このあたりで。

ジローやモスラたちにもよろしく。

ありがとう、原君

土生昶毅

あの山で、こちらの沢でと、原君の思い出を語りたいのだが、同期の仲間が多かったことも有ろうが、何故か合宿以外には原君とは一度も一緒の山行が出来なかった。

同期の仲間より2ヶ月ほど遅く入部した私だが、原君に出会った最初の印象が、“デカイな〜”だった。私は細身だし、小柄な方であった。原君は背が高く、がっしりした体格をしていた。大きなザックを背負って高い山、冬の山に登るにはいいだろうかと、羨ましが頭をよぎった。このことが、ついサボりたくなる厳しいトレーニングに負けるな、頑張れと後押しされたような気になった。入部およそ1ヶ月後の夏の合宿にはその成果は間に合わなかった。その後、山岳部の山行、また卒業後の山などで楽しく過ごせたのは初めて出くわした時の“デカイ原君への羨ましさ”の御蔭かなとも思っている。

卒業後、何時ごろか定かではないが秋に笹ヶ峰ヒュッテに行った時、原君がキノコを採りに

行ってくるとヒュッテを出て行った。その時一瞬、私は愚かな思いを持った。原君は東京人で文学部だったから、まさか毒キノコは持ってこないだろうな、と。原君はマイタケだったと思うキノコ（私こそ当時食べられるキノコは殆ど知らなんだ）を採って来た。そして、ヒュッテで雑談している時に原君が植物等にも興味が有り広く勉強していることを知った。それから何年後に、植物の菌を研究していた職場の後輩が、採集したキノコを食って、命には別状なかったが3人が腹痛で七転八倒したことを知った。その時、原君が何時頃からは知る由もないが、ずっと以前から長年キノコは勿論のこと植物等にも興味を持ち、細かく勉強していたに違いないと、当時の愚かな思いを持った自分が恥ずかしくなった。原君には誠に失礼な事だったのだ。ただ反省するしかなかった。

人生80年と言われるこの時代、原君まだ早いよ。ありがとう、原君。いずれ会いましょう。

原君との自然観察会

本郷一雄

ヒュッテが新しくなった2000年。彼と酒を飲んでいる時、こんな話が出ました。

1. 30年後の管理体制は？ 又、利用者はいるのだろうか？
2. 新しくなったヒュッテにたくさん来るのは

いいのだが、暇に任せて周辺の草木を草刈り機でむやみに刈っている。自分にも少し知識があれば、注意・指導ができるのだが・・・

場所は妙高とは対極の銀座5丁目の酒場。テナ



右から3人目が原君。自然観察会で
(2004年10月)



右から3人目が原君。自然観察会で
(2006年6月)

ント飲食店の債権回収の話をしている時でした。

1. の対策として、過疎地の牧場に連泊者を増やす仕組み作り。ヒュッテの音楽会はその一つ。私には参加者が不足した際、10人くらいを集め駆けつけることが命ぜられた。幸いなことにその必要は全くありませんでした。

2. については2001年から私の旧知のナチュラルリストによる自然観察会。春、秋の都合10回行いました。彼はその都度、貯めていた笹ヶ峰の動植物の名前や生態に関する質問をしてきました。(彼との観察会は彼の大病の後も、そして尾瀬でも行いました。)

これらの観察記録は、藤間熙子氏に『妙高高原の植物』として、コース別に、仙人池、真川の兩岸、ヒコサの滝まで、笹ヶ峰ダム〜カツラの樹まで、の形で残していただきました。昨秋、ストーブ横の棚にあるのを確認しています。

東京オリンピック時、平ヶ岳山頂付近で大雨での連続チンの際、テントの中でタッポンさん等と共に聞いた国立競技場の円谷の激走、オジンと3名で行った芦生演習林、台湾1周旅行中に登った高雄山、そして私の結婚式の司会までお願いしました。面白かったナ。ありがとう。

原剛くんへの手紙 (2016年8月、夏の思い出)

前田栄三

岳友原剛くんが逝って早や5ヶ月、時代は平成から令和へと動いている。そして令和元年！

3年前に彼に宛てた手紙を紐解き、往時を偲び冥福を祈りたいと思う。この手紙は、2016年9月1日に書き始め、9月27日に郵送したものです。多少、文言に見直しを加えました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

早や秋の風ですね。変わりはありませんか！

2016年の夏(8月)は、全くもって不思議なことに連日の如く君を想い、君との来し方(山岳部時代)を思い浮かべ、いつまでも元気で過ごしてほしい…と願う日々でした。こんなこと(1か月もの間、日々特定の友人の健康を思い遣る心)は、私にとっても初めての体験でした。

昨年8月に岳友西田八州男君が逝き、岳友濱本オジンさんから「徳島の吉田トンメンが会いたいと言っている」と伝えられ、8月4日に徳島を訪問する予定だった【一夜、歓談しました。】ことも私の心理的な背景にあったでしょう。8月3日夜、トンメンくんへの伝言の有無も確認したくて君に電話したのだけれど、昔と変わらぬ肉声に接し懐旧の情が一度に込み上げてきたのだろうか。

【この時の交信が、世都子夫人そして原剛君の声に接した最後となってしまいました。】

君に電話をした‘ことの発端’は、7月20日付の「笹ヶ峰ヒュッテの管理」に関する君のメールだ。一読して、正直、君の悲鳴に聞こえ

た。笹ヶ峰ヒュッテと言う荷に押し潰されそうになって喘いでいる君の姿を見る想いがした。同時に、一瞬、世都子夫人の顔が私の目の前を過ぎった。

私は、就寝中の君の病室で、世都子夫人にお会いしたことがある。奥さんのお許しを得て、岳友本郷一雄君と一緒に君を病床に見舞った折、闘病の様子、看病の様子、これからのリハビリのことなど、実に整然と淀みなく、抑制された声音で説明していただいた。リハビリに移行する話のくだりでは、「あとは本人次第」と言った奥様の表情には希望の光が差し、強靱な意思の強さと共に喜色を感じることも出来た。その世都子夫人が、君のメールを読んでる最中に何ゆえか私の目の前に現れた。そこに、貴メールにあった「71歳になった」というひと言が重なった。私が『もう笹ヶ峰ヒュッテという荷を置いてもいいだろう！後進にバトンを渡してもいいだろう！』と笹ヶ峰会MLに書いた所以です。

君との山の思い出を語ろう。2点に集約されますね！

一つは、3回生の時の11月山。槍から西穂高を目指すも、晴天の何日かを槍の肩で過ごした拳句、北穂高で撤退した時のこと。俄かに天候激変し、厳しい風雪の中を北穂の雪壁を登行。トップに行く君が「小屋があったぞー！」と叫んだ一声が強烈に印象に残っている。小屋に入るや否や、ラジュウスを出して点火したんだっ

け。互いに顔を見合せたなあ。(4～5年前に)改めて中尾モンヤさんの当時の記録を読むと、瀬沢岳の手前で撤退したんだなあ！

もう一つは1969年1月、5回生の時の冬剣。夕暮れま近の頃に“食料・燃料”を本峰まで担ぎ上げてくれた君たち4人(原、天外、米本、矢吹の諸君)。「フィックスが張ってあったので、(本峰行きを)決断した」と言った君の一言だ。うれしかったな。烈風雪の中、フィックス工作したのは我々京大パーティなのだから。

この「ふた言」は、終生忘れることは無い。山岳部時代の君との良き思い出、宝ものです。

笹ヶ峰ヒュッテに関しては、6月第1週末は君(コンサート)、第2週末は私、と棲み分けをして少なくとも12年が経過した。この間、どちらも継続してヒュッテを活用してきた。毎年6月になると、「音楽会の残照」或いは「残り香」として、君の健在ぶりを実感することが出来た。直接会うことは無くとも、毎年、君を身近に感じていた訳です。

さて、話をきみの7月20日付「メール」に戻そう。君のメールには、「今、人が足りない！なので笹ヶ峰会員外から公募して、ゆくゆくは管理委員になってもらう…」と書いてある。

夏仕様期間のヒュッテの世話役(小屋番)が必要なら、私も入りますよ。私同様「すわ鎌倉！」と反応し、「直ぐにもヒュッテに馳せ参じる意思」を表明した雲南懇話会幹事の人達もいます。で、管理委員の役割分担を確認(お尋ね)しました。こういう実務は、担当者と直接コンタクトして月日や期間をすり合わせるのが、紛れがなく有効です。しかし何故か返事(回答)が無かった。

年配者は、私もそうですが、年初にはその年の大よそのスケジュールを決めます。期間1週間くらいで年2～3回程度なら、私も入れると思いますよ。要は、Priorityの問題です。

ヒュッテの管理運営は透明であってほしい。笹ヶ峰会会員が希望すれば、いつでも、日本全国どこにいても、管理運営状況などを知ることができるようにしておいてほしい。その為の第1は、ヒュッテの管理運営に関わるホームページを立ち上げることですね。高品質を望まず、HP制作を苦しめない70歳前後のOBの支援を得たらどうですか。

【2019年4月現在、AACKホームページの中

に“笹ヶ峰ヒュッテ”のページがありました。対外的な広報版としては、とてもよく出来ていると思います。願わくば、会員向けに、事業計画、予実算管理状況、予約状況、公開時の管理人氏名、日々の管理運営状況・写真記録等を掲載して欲しいですね。】

第2は、HP制作を含め全体をマネージし笹ヶ峰会MLへの発信を苦しめない人に、「ヒュッテ管理運営副委員長 or 専務理事」の役回りを委ねることでしょう。笹ヶ峰会会員間の風通しを、ヒュッテを介して良くしてほしいです！

【必ずや、君の遺志・意向を踏まえて、後進の諸君が頑張ってくれることでしょう。ご安心あれ！】

君には、私以上に長寿を全うして欲しい。ご自愛専一を祈る。悠々自適に身体を労わってくれ給え！

追伸：9月も27日になりました。明日は鳥谷を歩くつもり。鳥谷から徳本峠への道は、初めてです。

10月中旬は、南会津の明治大学ワングル部の山荘を拠点に、付近の山々を歩く予定。

10月下旬～11月上旬の間、中国雲南省シーサンパンナタイ族自治州を訪問する予定です。

繰り返すけれど、ご自愛専一を祈ります！

・・・・・・・・・・・・・・・・

山岳部入部同期の高野共平(モスラ)君、井上治郎君、白井博樹さん、西田八州男君、そして原剛くん、みんな逝ってしまいましたね。

♪薪割り飯炊き小屋掃除、みんなでみんなでやったっけ、雪解け水が冷たくて、苦労したことあったっけ、今では遠くみんな去り、友を偲んで仰ぐ雲…♪♪

Guten Kameraden. ♪

Ich hatt' einen Kameraden, einen bessern findst du nicht ~♪
トランペット演奏曲を捧げます。私たちはU-tubeで聴いています。

♪静かな～夜更けに♪い～つもいつも～♪想い～出すのはお前のこと～♪

お休み～安らかに♪たどれ～夢路♪お休み楽しく～♪今宵もまた～♪♪♪

原君が逝ってしまった

渡辺良男

原と一緒に登ったのは合宿以外では4回生の時の第3次日高捜索隊と5回生の時の剣岳救助隊(1)と、どちらも遭難絡みの2回である。日高捜索隊で5月に静内からペテガリに登った時、途中で原がキノコを見つけてきて、「これは食べられる」という。他のメンバーは皆、恐る恐るであったが焼いて食べたら、実に旨く“笑いだす”ことはなかった。後で地元の人に聞いたら春椎茸だと言う。他にも彼が“食べられる植物”について実によく知っていたのには感心させられた。この捜索山行では雪解け直後のゴルジュの中で行動したので兩岸の岩が脆く苦労した。彼と私とで終始ザイルパーティを組んだが、2回ほど彼を滑落から確保した。

彼の山関係の活躍は卒業後さらに幅広くなり、多くの方と付き合いができたと聞いている。中でも笹ヶ峰ヒュッテ関係は現役時代、ヒュッテ係をしていたこともあってかAACK・笹ヶ峰会のヒュッテ担当みたいな存在になっていた。その活動の中で笹ヶ峰音楽会の企画運営は特筆される。私は結局、笹ヶ峰音楽会に一度も参加すること無く終わってしまったのは誠に残念であった。

同期で最初に結婚したのは私で、最後に結婚したのは原で、それもかなり遅かったはずである。素晴らしい夫人で、その夫人に感化されたのか芸術にも意欲を示し、前記の笹ヶ峰音楽会企画につながったと聞いている。その夫人が彼より1年ほど早く亡くなられ、愛する夫人とあの世界でも一緒になりたいとカソリックの洗礼を受けた、と葬儀の時紹介された。彼の夫人への思いが伝わってくる話であった。

「アネサ伝」(2)の原稿を依頼した新本政子さんから以下の話が伝えられた。「12月9日に原さんとランチをご一緒しました。メンバーは終活担当の内藤ひとみさんとピンボウさん、そして私共夫婦でした。酸素ポンベをゴロゴロ引っ張りながらもイタリアンのお店でワインをお代わりされ、これならお花見迄は・・・と祈っていたのですが。私などが(アネサ伝に)拙文を寄稿するのはチョット違うかな、原さんが



原(左)と渡辺。中ノ川源流域の捜索現場で(1967年5月22日)

書きなさいよ、と言うと、“へへへ”と笑っていました。これが私が聞いた原の最後の消息で、彼はこの食事会の後1か月を待たずに1月2日に亡くなってしまった。

載せた写真は1967年5月の日高捜索山行の時のもので、彼はこの時21歳である。後年、東京在住の同期生で時々会う機会があったが、彼は学生時代と変わらない童顔のままで、話し方も雰囲気も昔と同じであった。そしてそのまま逝ってしまった。

[参考]

- (1) AACK ニュースレター No.85 「剣岳大量遭難救出劇」
- (2) AACK ニュースレター No.88 「アネサ伝」。
なお [写真2] には原君も写っている。

第44回雲南懇話会（2018年4月21日開催） 講演概要

山岸久雄、前田栄三



第44回雲南懇話会は2018年4月21日(土)、京都アカデミアフォーラム（東京都千代田区丸の内新丸ビル10階）で開催され、101名の方に参加いただきました。開催から1年経過しましたが、講演の概要を紹介いたします。1. ～3. は山岸がまとめた講演概要、4. は前田が講演の要点を口述に沿ってまとめたものです（概要に添えられた会場風景、講演者の写真は金井義介氏撮影）。

1. トピックス「京でも見えたオーロラー明和7年の巨大磁気嵐」

－2018年1月、文理融合シンポジウムの成果紹介－
国立極地研究所名誉教授、AACK
山岸久雄

東日本大震災の後、古い書物（日本三代実録）に貞観11年（869年）にも、陸奥の国を大津波が襲ったとの記載があることが広く報道された。最近、このように古典籍に書かれた天変地異の記録を地球科学的に見直し、そこから貴重な情報をとりだそうという試みが行われている。そこでは文系と理系の研究者の協力が必須となる。総研大学融合推進センターは2018年1月、「古典籍文理融合シンポジウム」（立川市）を開催し、このような研究の成果を発表した。講演者はそこで発表された研究の一つ、「日本で見られるオーロラと巨大磁気嵐」（片岡龍峰、岩橋清美）に



ついて紹介した。

旧暦明和7年7月28日（1770年9月17日）、日本国内の各地で赤気（赤いオーロラ）が見られたことが多くの古い書物に遺されている。松阪市教育委員会所蔵の「星解」という書物に載ったオーロラのスケッチを分析すると、このオーロラは京都上空まで達していたことがわかった。この日、中国、ヨーロッパ、そして南半球でもオーロラが見えたことが世界各国の古い書物に遺されており、大磁気嵐が発生していたことがわかる。

歴史上最大の磁気嵐は1859年に発生したキャリントンイベント（天文学者キャリントンが太陽面を観測中に大爆発が目視され、その翌日、地球は大磁気嵐に襲われた）とされているが、この時はオーロラが北緯30度付近まで到達した。明和7年の磁気嵐は、これに匹敵する緯度でオーロラが見られたことになる。

片岡らは、地球磁場の強度は過去数世紀にわたり減少傾向にあり、明和7年当時の地球磁場はキャリントンイベント時よりも強かったことに気付き、これを考慮して計算すると、明和7年の磁気嵐はキャリントンイベントを凌ぐ、歴史上最大の規模であった可能性が高まった。このような知見が得られたことは、古典籍を地球科学の視点で読み解くことの成果の一つといえよう。

2. 「ヒマラヤ氷河研究最前線」

－2009年のヒマラヤ氷河スキャンダルとその後の展開－

名古屋大学 大学院環境学研究科教授、
笹ヶ峰会 藤田 耕史

IPCC第四次報告書のヒマラヤ氷河に関する記述に誤りがあることが2009年、Science誌上で指摘され、「ヒマラヤ氷河スキャンダル」もしくは「グレーシャーゲート」などと呼ばれた。その後、同報告書には他にも信頼性に乏しい記述があることが明らか



になり、IPCC 全体の信頼性を揺るがす一大スキャンダルとなった。

藤田教授は、同報告書のヒマラヤ氷河に関する問題箇所の改訂を行った国際研究チームの一員を務めた、第一線の雪氷学研究者である。本講演ではヒマラヤ氷河スキャンダルの経緯と原因、IPCC の対応を説明した後、このスキャンダルをきっかけに、世界の氷河研究コミュニティがヒマラヤを含むアジアの高山域氷河に注目し、その後の数年間で多数の研究成果が得られたことを紹介した。

アジア高山域の氷河の消長（質量収支）は、世界の海面の高さに影響するほか、その融解水は下流の河川流域に住む 17 億人の生活に利用されるなど、社会的な関心は高い。ヒマラヤ氷河スキャンダル後に得られたアジア高山域氷河の広域質量収支の研究は手法で分けると（1）現地観測、（2）モデル計算、（3）人工衛星観測（重力による氷河質量観測、氷河表面高度観測）があり、その研究成果は藤田教授の総説論文（藤田、2014）¹⁾ に詳しく紹介されている。

重力観測衛星は、広域にわたる氷河の総質量変動を測定することができるが、湖水に流入し蓄えられる氷河融解水の質量も含めて測定してしまうため、氷河変動量が少なめに見積もられる傾向がある。衛星に搭載したレーザー高度計による氷河表面高度観測は、比較的狭い範囲の氷河の消長を、より正確に測ることができ、東ヒマラヤでは顕著な氷河縮小が見られ、カラコルムでは氷河が微増するという地域差が明瞭に検出できている。これらの衛星観測に基づく研究結果は、いずれもヒマラヤの氷河は、世界の他の氷河に比べ著しく減少しているわけではないということを示しているが、見積もられた氷河減少量は、研究手法により数倍の開きがある。

藤田教授は、今後の研究課題として、見積の精度を上げてゆくには、質量収支の素過程を現地調査で明らかにしてゆくこと。特に涵養域である標高の高い氷河や、デブリで覆われた下流域の氷河での現地調査が極めて重要であることを指摘した。このようにアプローチが難しいヒマラヤの氷河に、確かな登山技術をもった雪氷学研究者が赴き、現地調査に活躍することに、心から声援を送りたい。

¹⁾ 藤田耕史，2014：ヒマラヤ氷河スキャンダルとその後，雪氷，76，69-78。

3. 「通える夢は崑崙の 高嶺の彼方ゴビの原」 —李陵説話と西域慕情—

龍谷大学教授、京都大学名誉教授（中国法制史）
富谷 至

富谷名誉教授は本講演の 1 年前、第 40 回雲南懇話会で「西域のロマンと史実」- 悲劇の將軍・李陵とかれの末裔—という演題で、BC100 年頃の漢の武将、李陵にまつわる悲劇について講演された。匈奴との戦で勇敢に戦った李陵は捕虜となり、不屈の精神でその境遇に耐えていたが、李陵が寝返ったとの誤報が漢に伝わり、これを信じた武帝は李陵の一族を反逆罪への連坐として族刑（斬首）にしてしまう。これを知った李陵は匈奴に寝返らざるを得なくなり、二度と祖国に戻ることはなかった、という悲劇である。当時は逆臣とされた李陵であったが、その後、時代が下るに従い、李陵悲話伝説が生まれ、悲劇の英雄へと評価が変わっていった。本講演では、このような評価の変化がいつ生じたのか、また、その社会的背景は何であったのか、について語られた。富谷名誉教授の第 40 回と第 44 回懇話会での講演内容はヒマラヤ学誌の最新号に掲載されている（富谷、2019）²⁾。ご一読願いたい。以下、本講演の要点を上記論文より引用させていただく。

漢帝国の滅亡の後、華北の地は異民族が支配し、漢人は揚子江流域～江南一帯へ追いやられ、東晋王朝を建てるに至った（南北朝時代）。南の漢人らは、いつの日か華北を奪還したいと願っていたが、圧倒的な力を持つ北方騎馬民族を前に、それは見果てぬ夢であった。しかし、華北の地で豪族として勢力を維持していた漢人の一族（隴西の李氏）もあり、その代表は李玄盛であった。李玄盛は西暦 400 年に西涼を建国し、東晋に恭順の意を伝える使者を送った。

南の漢人にとって、見果てぬ夢の地、華北で活躍する李玄盛は英雄と映った。史書には、李玄盛は李陵一族と同じ隴西の出身であり、李陵の祖父、李広將軍の十六世の孫、という記述がある。李陵の時代から 500 年経ち、逆臣のイメージが風化した頃、李陵一族の末裔が華北に英雄として登場した。南の漢人は改めて李陵の悲劇を思い出すことになり、これが李陵悲話伝説と なっていった。



南の漢人にとって、自分達の祖先が活躍した華北や西域は、遙か彼方の地であり、現実とはかけ離れた想像の世界であった。唐詩には西域を抒情をこめて詠う「西域詩」というジャンルがあるように、西域は物語、詩文の世界となっていた。しかし、その想像の世界の強さは歴史家の目を曇らせ、歴史の解釈に影響を及ぼすほどになった。本講演では、その例を二つ挙げられた(富谷, 2019 参照)。なお、富谷論文には詩文集『文選』に載っている「李少卿答蘇武書」(李陵が、おなじく匈奴の捕虜となった蘇武に送ったとされる書簡)の全文訳が載っている。そこに漂う西域慕情を読みとっていただきたい。

²⁾ 富谷至, 2019: 西域ロマンの成立, ヒマラヤ学誌, 20号, 75-83.

4. 「尾瀬と共に 54 年」—札幌、京都を結んで— 尾瀬沼畔 長蔵小屋三代目 平野 紀子

片品村は群馬県の北北東に位置し、新潟・福島・栃木の各県に接しています。標高は大よそ 1000m (最高 2578m、最低 640m、役場所在地 813m)。片品村戸倉の戸数は約 40 戸ほどです。



明治 22 年 8 月、平野長蔵は、僅か 19 歳で燧岳に独りで登頂し、登山道を拓きました。同年 9 月には再び 30 人の信者と共に燧岳を登り、石祠を建祭しています。勿論、それまでに本人は独学で木曾の御嶽行者について神道の道を学んだ訳です。小学校は 3 年までしか行けなかった貧農の子でありながら、漢学と日本の古典を深く愛し、神道に仕える頑固一徹な人でした。

長蔵は学生を可愛がりました。長蔵の夢は、将来、尾瀬沼畔に学生村を作り、質実剛健な気を養うことにありました。嘆願書を作り、入山してくる人たちに賛同を呼び掛けました。大正から昭和初期という時代背景、置かれた厳しい環境を考えると、長蔵は、相当な人だったと思います。

2 代目長英は、日光今市で育ちました。大正 7 年尋常高等小学校高等部卒業(今の中学 2 年)、尾瀬沼に入ります。一労働力として連れていかれ、約 60 年間、尾瀬で暮らす訳です。

『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』(庄

田元男訳, 講談社学術文庫, 2017 年)を見ると、アーネスト・サトウ(通訳官、駐日英国公使)は、当時の片品村村長の家に泊まっています。村史を調べたところ明治 30~32 年頃に、日光・金精峠から尾瀬、八十里越えを経て新潟に抜けています。彼の次男、武田久吉先生が、明治 38 年(1905 年)に尾瀬に入り「尾瀬紀行」を著わし、日本山岳会「山岳」(創刊号、1906)に掲載されました。その紀行文を読んだ画家の 大下藤次郎さんが、1908 年 6 月下旬~7 月初旬の頃に 4 人で尾瀬に入り写生旅行をしました。大下藤次郎さんは、今でいう水彩画家、水絵です。彼は、1905 年に「みづゑ」という美術雑誌を創刊し、その臨時増刊号に尾瀬特集号として尾瀬の作品群を紹介された。この時初めて、尾瀬が世間に知られることになりました。東京の山登りしている人たちの目に触れ、徐々に入山してきました。

(- 中略 - 紀子さんの祖父母、ご両親、北海道新聞社入社後のご自分の働く様子、山登りのこと等が語られた。長靖さんの小学・中学・高校生時代の様子、尾瀬沼のダム計画、なども語られた。)

長靖は、長英の長男として片品村に生まれました。昭和 29 年に京都大学に進み、昭和 34 年北海道新聞社に入社。紀子は、昭和 31 年入社。長靖が入社した昭和 34 年頃は安保闘争の時代、組合も元気な時代でした。平野と同じ青年部の役員になった訳です。長靖は、長蔵小屋を継ぐ予定は無かった。しかし、後継ぎと目されていた弟が、静岡の海岸で急逝。母靖子には、「自分は山の人間なので、海には行かない」と言っていたのだそうですが。

長靖が昭和 38 年に尾瀬に戻ってきた時、尾瀬はゴミの山だった。本当にひどかった。長靖は、“長蔵が小屋を開き燧岳を開山したから、こうなった”と言って、毎日腕組みしては燧岳の方をじっと見つめて苦しんでいました。昭和 41 年、山岳観光道路の建設工事が始まり、どんどんどんどん三平峠への道を壊していきました。そしてついに、“登山者がいつもヨイショっといって腰を下ろし寛いでいた岩清水”を壊してしまいました。長靖は堪えられなくなって、朝日新聞の声欄に投書しました。「岩清水が枯れます。皆さん、助けてください」。でも全然反応がありませんでした。

そうこうしている内、7 月 1 日、環境庁が発足。

初代長官に就任した大石武一は、「私は、日本の自然を守るために力を尽くします。」と述べた。このコメントを母靖子が見て、「この方にお頼みしてはどうか」と言いました。長靖は単身上京し、大石長官のご自宅を訪問。私も一緒にしました。ご自宅の玄関には大きなコケシ人形が二つありました。それが、非常に印象的でした。何と、大石長官は1週間後に現地視察することになりました。至仏山から尾瀬ヶ原を望み、尾瀬沼、最後に三平峠に来ました。視察を終えた大石長官は長靖を呼び、「この道は止めようね」と言って下さった。環境庁の地元への説得により、工事は確実に中止されました。

長靖が亡くなったのは、今でいう過労死ですね。山にいたその晩はもの凄い雪だった。戸倉でも凄い雪だった。それでも翌日に神奈川で予定された自然保護の集いに参加するために、(昭和46年12月1日朝)下山しました。夏なら、長蔵小屋から30分ちょっとで三平峠、それが峠下到着は正午近く。大阪工業大学の学生が三平峠下にテントを張っていて、その人たちのトレースを利用したのですが、三平峠に17時少し前、一ノ瀬に21時頃ようやく辿り着きました。付き添っていた大阪工大の学生に「私は長

蔵小屋の息子です。こんな形で死ぬのは恥ずかしい。」と言いながら、子供たちの話をして、最後に「生涯に悔いはなかった」と言って息を引き取りました。36歳でした。

私は、30歳の若さで山のような借金と3人の幼児を抱えてしまいました。祖父母は孫の世話、私は借金返済。菌を食い縛るもの凄い日々。毎日、1日が終わると、「あア、今日も1日、無事に終わった」、この連続でした。生きていて一番うれしかったことは、「やれた」ということ。「1年間!あア、自分に出来た!」。それには、昔から働いていた2人の番頭の助けがありました。松枝岐からひとり、67歳で退職(現在88歳)。片品村からひとり、通称すげさん(80歳)。すげさんは今も戸倉で畑仕事をしてきてます。

(-中略- 佐藤栄作総理と大石武一環境庁長官、長男太郎さん(4代目)、長蔵小屋で働いた人たちのその後、現在の利用者数と経営のこと等が語られた。)

私は今、無給で働いています。息子が「ボケ防止のために良いのじゃないの」と言うものですから。でも、あそこで働けるということは「神様、ありがとう。素晴らしい。」と私は思います。長蔵お爺さんも、たった一人でやっていたんだ。本当に貧しいけれど、暮してた。良いじゃないか!

会員動向

編集後記

今年1月に逝去された原剛さんの追悼文を、京大山岳部同期の方々からいただきました。ありがとうございました。ここから原さんのご冥福をお祈りいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2019年7月16日

原稿送り先: 横山宏太郎

発行日 2019年6月20日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所